

【論考】

## 留学生の修学意識

### -修学と就職の間で揺れる留学生-

International Students' Consciousness about Attending University:  
Reality of International Students who are Wavering between Attending  
University and Employment

聖学院大学 基礎総合教育部准教授 留学生センター所長 岡村 佳代

OKAMURA Kayo

(Comprehensive Core Curriculum / International Student Center, Seigakuin University)

キーワード：留学生の修学意識、留学生の中途退学、ベトナム、ネパール、外国人留学生

#### はじめに

近年の著しい留学生の増加に伴い、留学生が多様化していると言われる。留学生の出身国はその一例だろう。10年前は、日本における留学生といえば、中国、韓国、台湾などの東アジア出身の留学生を中心で、その地域出身の留学生が全体の8割近くを占めたが(日本学生支援機構, 2008)、2018年現在の留学生の出身国上位3ヶ国は、中国、ベトナム、ネパールとなっており(日本学生支援機構, 2019)、東南アジア、南アジアからの留学生の増加が顕著である。東南アジアや南アジアからの留学生の増加は、日本の労働力不足との関連でも語られ、留学生の日本留学の目的や日本での生活の在り方にも影響していることが指摘されている。日本では非熟練労働の人材が不足しており、それを外国人材に期待する労働現場のニーズと、就労により収入を得ることを期待する非漢字圏のアジア諸国出身の留学生のニーズが合致し、留学生は資格外活動としてのアルバイトに従事しているという(中央教育審議会, 2018)。働きながら学ぶ留学生の問題は、「留学生30万人計画」の課題としても挙げられており、アルバイトへの傾倒が日本語習得や大学での学修への悪影響、ひいては中途退学、犯罪等への関与につながることを懸念されている(中央教育審議会, 2018)。筆者の周りでも、近年、大学入学を果たした学部留学生が、就職を理由に中途退学していく状況が散見されるようになった。1990年代の留学生の中途退学者の全国調査によると、学部留学生の中途退学の理由は経済的な理由や不適

応などであり、日本での就職という回答は0%であった(伊藤・井上, 1999)が、その事情が変化してきていることが考えられる。

このように、「留学生」と一口に言っても、国籍、文化的背景、留学目的、留学生活の様相は実に多様であり、ある一つの留学生像をもっては語ることはできない。東南アジア、南アジアの出身者で就職を理由に中途退学した留学生だけを取り上げても、前述のような「来日当初より就労が目的」、「アルバイトに傾倒している」という留学生だけではないだろう。筆者の印象では、より曖昧な、揺れ動く心理状態のなかで中途退学や就職を選択していく留学生の方が多いように感じる。確かに、将来日本で就職することを目的として来日する留学生は多いが、より良い就職をするために、大学に進学し、学び、日本人学生と同じように就職活動をしたうえで、就職をしたいという目標を持っているように思う。しかし、一部ではあるが、大学入学後1年~2年で中途退学、就職を選択する留学生もいる。それはなぜなのだろうか。

本研究では、大学に入学後、卒業を待たずに就職したいと考えるようになっていく留学生の心理的变化について、インタビュー調査を通して探ることを目的とする。そのことから、多様なニーズを抱える新たな留学生の一端を描き出し、留学生に対するより良い進路指導や大学でのサポートの可能性を探る。

## 調査の概要

### 対象者

本研究では、近年増加している東南アジア、南アジア出身の留学生を対象として調査を実施することとした。対象者は、関東地方にある私立大学に在学している男子留学生4名で、出身国は、ベトナム、ネパールである。学年は2~3年生、所属学部は全員文系学部で、年齢は24歳~27歳、滞日年数は3年~5年、日本語能力は全員N2~N3合格以上であった。いずれの対象者も、私費留学生であり、学費や生活費のためにアルバイトをしている。詳細を表1に示す。

表1. 対象者のデモグラフィックデータ

	国籍	学年	所属学部	年齢	滞日年数	アルバイト	来日から現在までの略歴
A	ベトナム	2年	文系	24歳	5年	有	母国の高校卒業→来日→日本語学校→専門学校→大学
B	ベトナム	2年	文系	26歳	3年	有	母国の短大卒業→来日→日本語学校→大学
C	ネパール	3年	文系	27歳	3年半	有	母国の大学卒業→来日→日本語学校→大学
D	ネパール	2年	文系	25歳	4年	有	母国の高校卒業→来日→日本語学校→専門学校→大学

## 調査・分析の手続き

2018年7月、各対象者につき1時間程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューに際しては、研究の目的、調査方法などの説明と調査協力者への配慮や権利、データ管理についての説明を行い、対象者からの同意が得られた段階でインタビューを行った。インタビューでは大学入学後の修学状況について、困ったことや感じていることなどを語ってもらった。分析については、インタビューデータを文字化した後、KJ法(川喜田, 1967)の手法を援用し、【大学入学後から現在までの修学意識】に関するデータの抽出、分類を行った。

## 結果と考察

分析の結果、留学生の【大学入学後から現在までの修学意識】(121例)は、大カテゴリ5つ、中カテゴリ1つ、小カテゴリ1つに分類された(図1)。以下に、これらのカテゴリごとに、分類の詳細と具体的な語りを挙げながら、内容の説明を行う。



図 1. 留学生の「大学入学後から現在までの修学意識」(121)

## 大学入学時点での修学意識

1つ目の大カテゴリー『大学入学時点での修学意識』(27)には「不明確な目標による大学進学」(10)、「大学における学びの期待」(8)、「日本における留学生の就職に関する理解」(5)、「就職への焦り」(4)という4つの中カテゴリーが含まれる。

まず、「不明確な目標による大学進学」には、日本語学校卒業後の目標が明確でなかったこと、とりにあらずビザを延長するために大学進学を選んだこと、進学先の大学や専攻、そもそも大学に進学すべきか就職すべきか迷っていたことなどの内容が含まれる。特徴的な語りは以下の通りである。

- ・日本語学校から大学選ぶときに、たぶん多くのネパール人がやっぱり情報が分かんなくて、ビザの延長したいだけ。それだけで大学どこでも自由に入って、ビザの延長できた後、そこから考える人が多い。私もそれと同じだった、最初は。(対象者C)

Cは、来日時に目標を明確に定めておらず、また、情報も十分ではないことから日本語学校卒業時にも、まずはビザを延長する手段として大学進学を選び、その後のことはそのときに考えようという状況であったことがうかがえる。

次に、「大学における学びの期待」には、日本での生活においては日本語が重要であると認識し、大学で自分の日本語能力を伸張させようという意欲や、日本の大学で新たな専門科目の受講ができることに意欲を持っていたという内容が含まれる。

- ・いつかはビジネスをやりたいのかと思って、一応考えてたんだけど、で、(専門学校で)なんかビジネスのこといろいろ知ってきて、それでなんか、自分のビジネスの知識をもっと広げたいと思って。専門学校まで就職したくなかったから、絶対大学入ろうと思って入ったんだけど。(対象者D)

Dの語りからは、専門学校で学んだことを生かしつつ、さらに大学で学ぶことに意欲を持っていたことがわかる。

3つ目の中カテゴリー「日本における留学生の就職に関する理解」には、大学を卒業することで就職機会が増加すること、大学の専攻と職種には整合性が必要であるとの認識を持っていたという内容が含まれる。

- ・一応(大学を)出たら、自分でやりたいこと、機会、チャンスがあるんですね、留学生としたら。なんか(選択できる)仕事の量が増える。(対象者D)

Dがこのように語っているように、大学を卒業することで、よりチャンスが広がるという認識を持ち、より良い就職をしたいと考えていたことがうかがえる。

4つ目の中カテゴリ「就職への焦り」には、同時期に専門学校を卒業し、それぞれの大学に入学した友人が就職していくことや、二十代後半に差しかかる自分の年齢を意識することから、大学入学当初より就職への焦りを感じていたという内容が含まれる。

- ・私の専門学校の友だち5人ぐらい一緒に大学に入りました。でも、みんな(就職して大学を)辞めましたんですよ。私、専門学校終わったのに、就職しないかったんです…(対象者A)

Aの語りからは、大学入学後、周囲の友人の状況を知り、やはり専門学校卒業後に就職すべきだったかもしれないという焦りや迷いが生じていることがわかる。

以上の通り、対象者の留学生は、大学入学時点において、大学での新たな学びに期待を抱く一方で、目標が定まっていなかったり、迷いや不安、焦りが生じていたりすることが示されている。

## 大学修学における困難

2つ目の大カテゴリ『大学修学における困難』(27)には「大学生生活の多忙さ」(13)、「アルバイトによる大学修学への悪影響」(9)、「日本語能力不足による挫折感」(5)という3つの中カテゴリが含まれる。

まず、「大学生生活の多忙さ」には、授業時間が90分、それを1日に3~5時限受講するという大学生活の長さや勉強量の多さへの苦勞に加え、出席が重視され、欠席、遅刻に厳しい大学への違和感を感じていたことなどの内容が含まれている。

- ・ある日は、1限目から5限目まであるんで。で、あと特にこの大学が(いろいろ)あるから、もっとなんか遅くなって。(対象者B)
- ・勉強…忙しいです。あの、課題もいっぱいです。(対象者A)

BやAの語りからは、特に1~2年次は履修する授業も多く、朝から夕方まで高度な日本語能力が求められる大学の授業を受けながら、課題をこなすことが大きな負担となっていることがうかがえる。

次に、「アルバイトによる大学修学への悪影響の認識」には、大学とアルバイト双方のバランスを保ちながら両立させることが難しいという内容が含まれる。

- ・(大学の授業が)朝から夜(夕方)まで。それで、1人暮らし生活してるから、バイトもしないといけないんで、夜必死にやったりとか。(バイトを)ちょっとだけにしても、あんまり休めない時間が多くて、自分がなんか、生活がつかったです。それが一番大変です。(対象者 D)

Dの語りからは、これまでの日本語学校や専門学校とは異なり、大学では授業の時間が長く、その後にアルバイトの時間も確保して、大学の課題もこなさなければならない生活のなかで気が休まる時間がなく、時間的な余裕のなさだけでなく、精神的にも余裕がなかったことがうかがえる。

3つ目の中カテゴリー「日本語能力不足による挫折感」には、日本語能力がなかなか伸びないことへの不安や大学の授業についていくことが難しいという内容が含まれる。

- ・その…本を読んだときも全然分かんない、日本語。(中略)知識が広がらないということです…(対象者 C)
- ・大学のほうは、日本人の中が(で)、授業出ますので、こう、日本語あまり分からないの部分はいっぱいあります。(対象者 A)

CやAの語りからは、日本語の専門書を読んでも意味がわからず、きちんと知識を得られない不安感や日本人と同等に専門科目を受講していくことへの困難が示されている。

このように、高度な日本語が要求される大学の授業を受けるためには、今まで以上に学習時間を確保する必要があるが、アルバイトもしなければ日本での留学生活が維持できないということから、それが難しい状況であることが語られている。時間的な余裕のなさや大学の勉強がしっかりこなせていないことが、精神的な余裕のなさや挫折感へとつながっていく様子が示されている。

## 大学修学意欲の減退

- 3つ目の大カテゴリー『大学修学意欲の減退』(24)には「学業不振による修学意欲の低下」(19)、「経済的な問題による修学意欲の低下」(5)という2つの中カテゴリーが含まれる。

まず、「学業不振による修学意欲の低下」には、出席状況や単位取得状況が悪化していることを認識し、学業を継続していけるのかと不安になったり、このままでは就職にも悪影響があるのではないかと懸念したり、学業が振るわない自分への嫌悪感を感じるという内容が含まれる。さらには、大学修学を諦めて、退学しようという気持ちも含まれる。

- ・最初(しっかりやろうと)思っていた(ことが)、自分が実際そのことに守れなかった。日本で。ちょっと日本で続くかどうか分かんなくて…(対象者 C)

- ・(落ち込んだりするの)それは、あの一、勉強しないので、悪い点もらって、後悔して、でももう遅いから、ま、それは、自分のせいだから、しょうがないけど。(中略)せつかく日本来ましたんですけど…今まで何もできなかった(何も達成してない)です…(対象者 A)
- ・成績が取れないとなんか、いい会社に入れなのかは分かってきて。バイトしながらなんか、学校も出るのがつらいなと思ったから、今なんか、何も考えない、辞めるつもりだけど。(対象者 D)

C、A、Dの語りからは、当初持っていた目的や意欲が、大学での学業不振により減退していった様子がうかがえる。

次に、「経済的な問題による修学意欲の低下」には、学費や日本での生活には想像以上にお金がかかることを認識し、経済的な面での目処が立ちにくい状況から、大学修学意欲が減退しているという内容が含まれる。

- ・留学するとなんか、お金も稼がないといけないんだから、1人暮らしだからお金を稼がないといけないから。で、なんか、絶対勉強したいとか目的で来ても、お金を稼がないといけないんだから、その間になんか、考え方が変わる、変わる可能性があるんですね。(対象者 D)

Dの語りからは、勉強したいと思って留学したにも関わらず、経済的な問題によりその意識が変化していったことがうかがえる。

このように、学業不振や経済的な問題により、大学への修学意欲を減退させていくことがうかがえる。留学生にとっては、学業面での充実や経済的な問題をクリアすることは大変重要なことであり、特に学業に関することは、彼らの留学生活の中で大きなウェイトを占めていることが語りの多さからも示されている。

## 大学中退・就職に向かう要因

4つ目の大カテゴリー『大学中退・就職に向かう要因』(16)には「大学卒業よりも就職を重視する価値観」(8)、「日本就職への意識強化」(7)の2つの中カテゴリーと「学業不振の際の支援者の不在」という単独カードが含まれる。

「大学卒業よりも就職を重視する価値観」には、大学を卒業することに対して価値を置かず、大学を中途退学しても就職できる方がいいという価値観を得ていくという内容である。

- ・(大学を卒業することは)あー、そんなに重要じゃない。(中略)なんか、ベトナムの短大ぐらい卒業したんなら、特に…(対象者 B)



このBの語りのように、日本で就職できる要件を自分が備えていると認識した場合には、日本での大学卒業を重視しなくなる様子が見えてくる。

次に、「日本就職への意識強化」には、結婚などの自身を取り巻く状況の変化により経済的な安定を重視する志向になったり、現状のままでも就職可能な会社にアクセスしてみたところ反応が良かったことから日本での就職の希望を再燃させていくという内容である。

- ・最初は、(大学を続けるか就職かは)50%ぐらい。で、結婚したんで、仕事やらないと、自分の家族がちょっと困るかなと思ってらるんで。(中略)自分で調べて、今学生で、もし途中でやめても、外国人を探してできますか?って最初から調べて。あと卒業した(短大の)専門が日本でできますかどうか調べて。(対象者B)

Bの語りからは、留学期間中に母国にいた恋人と結婚したことにより、家族への責任感から就職したいという意識を強化し、実際に就職に向けて動き出していったことがうかがえる。

単独カードとして「学業不振の際の支援者の不在」があり、以下はDの語りの内容である。

- ・自分がやりたいこと、こういう目的があったんだけど、でも、ダメじゃん、どうしようかな…(中略)その場合がなんか、いろいろ、なんか、他の人から手伝い、アドバイスをしてもらわないとそこが困るんだよね。(対象者D)

Dは、学業不振の際、アドバイスや進むべき方向を示してくれるような周囲からのサポートがあれば、さまざまな選択肢の中からより良い選択ができたのではないかと振り返っている。

このように、大学での困難、修学意欲の減退の末に、大学の修学を諦め、就職への意識を強めていく要因としては、大学卒業よりも就職を重視する価値観を持ち、学業不振の際に支援してくれる人がおらず、自身を取り巻く状況の変化があったことが示されている。また、実際に求人のある会社にアクセスすることで、より現実的に大学中退後の就職の可能性を見出していく様子が見された。

就職に向かって動き出したあとには、小カテゴリー「就職後への期待」(3)に含まれるような大学を継続することよりも、就職したあとの生活やチャンスに期待するようになる様子が見えてくる。

- ・目の前にあるものを使って就職して、で、いつか自分にやる(べき)ことが絶対あるかなと。で、もし、やること見つかったら、絶対(その道を)進もうと思ってる。(対象者D)

## 大学修学継続への支持要因

5つ目の大カテゴリー『大学修学継続への支持要因』(17)には「周囲からの大学修学への支援」(5)、「大学修学継続への意志」(5)、「大学卒業を重視する価値観の獲得」(4)という3つの中カテゴリーと「親の大学卒業への期待の認識」(3)という小カテゴリーが含まれる。

まず、「周囲からの大学修学への支援」には、大学の教員やアルバイト先の社員など周囲から大学継続へのアドバイスを受けたことや親が経済的な支援をしてくれたという内容が含まれる。

- ・E先生と、何回も話しましたんですね。大学入ったら、最後まで頑張ってくださいと言ってました。(対象者A)

Aの語りからは、何度も大学の教員に相談にのってもらい、根気強く大学継続の意義などを伝えてもらったことにより、大学を辞めずに頑張ろうと思うようになったことがうかがえる。

次に、「大学卒業を重視する価値観の獲得」には、今後の自分にとって大学卒業は重要であるという認識を強めていったという内容が含まれる。

- ・卒業することが重要だと思う、私は。2年生までは大学よく知らなかった、いろいろなこと。その後、自分で調べたり、先生とかに聞いたりとか相談に行って、いろいろなことを知ったので、これから大学卒業して仕事したほうがいいと思う。(対象者C)

Cの語りからは、大学の教員に様々な相談をすることで、大学を卒業することが重要であるとの価値観を獲得していったことがうかがえる。

3つの中カテゴリー「大学修学継続への意志」には、これまで頑張ってきたことを無駄にしたいくないという思いが強くなったり、大学の修学継続への意欲が高まり親に資金的な援助をしてもらうよう根気強く交渉をしたりしたという内容が含まれる。

- ・もう勉強するかしないか、相談して、勉強するなら(親が)ちょっと助けないといけないから。勉強しないなら、私ネパール戻ります。(対象者C)

Cは、自分はアルバイトをしに日本に来たわけではなく、学業に集中できる環境を手にいれたいと考え、親に経済的な援助をしてほしいと根気強く交渉したと語っていた。なぜ自分が留学しているのかを考え直し、大学の勉強にしっかり向き合えないのであれば、帰国しようという覚悟でいたという。

小カテゴリー「親の大学卒業への期待の認識」は、親が大学卒業を望んでいることを理解し、それに応えようという内容である。

このように、一度は大学修学意欲が減退していた場合においても、周囲からの支援を得ることができ、大学卒業が自分の人生にとって重要であるとの価値を見出し、大学修学継続への意志が芽生えることにより、再び大学で頑張ろうという意識が強化されていくことが示されている。さらに、それにより、中カテゴリ「現状への納得」(8)の内容のように、状況を受け入れ、納得していくことも示されている。

- ・(ベトナムにいるより)絶対日本のほうが成長できます。(対象者A)
- ・ネパールは日本の大学とルールが違って。やっぱり日本の大学のほうが一番いいと思ってます。今は時間を守ってるから、毎日、学校来る時間とか、何でも時間守ってるから、自分が満足できる。(対象者C)

AやCの語りからは、自立した生活のなかで成長していることや大学生活に適應してきていることなどの自分の良い面に目が向き、自信が芽生えていく様子がうかがえる。また、所属している大学の良い点にも気づくなど、自身を取り巻く状況にも納得していることが示されている。

以上の通り、本研究の留学生は、入学当初はビザ延長のためにとりあえず大学に進学するなど目標が不明確である一方で、大学での学びに期待していたことが示されている。その後、大学修学における困難を経験するが、特に、学業不振は彼らにとって大きな修学継続意欲の低下につながることを示されている。その際に、大学のなかではもうチャンスがない、大学を卒業しても意味がないと判断するのか、大学のなかで再び頑張ろうと思えるのかは、周囲の支援の有無によるところが大きいと考えられる。

### おわりに—大学修学と就職の間で揺れる留学生支援の可能性

本研究において、大学入学後からの修学意識の変化を見ていく中で、留学生が大学修学を継続させていくための支援の可能性として、いくつかのポイントが示された。以下にカテゴリの内容と関連させながら整理する。

#### 1) 明確な目標設定

大学入学時点での修学意識に関して本研究の対象者が語っているように、日本語学校卒業後の進路選択の際、大学に関する知識や情報が少ないために、なんとなく大学に進学していることがうかがえる。留学生がどのようなライフプランを描き、なぜ大学進学が必要なのか、大学ではどのような学びを得たいのかなど、しっかりと考える機会を留学後(日本語学校在学中)にも設ける必要があるだろう。

## 2) 大学生活に関する事前の情報提供

大学修学における困難において語られていた内容は、本研究の留学生だけではなく、多くの留学生が、大学入学後しばらくすると経験することだろう。4月後半になると彼らの表情からも慣れない状況での大変さがうかがえる。大学は週に3日程度で、1日の時間もそんなに長くないと思っていたのに聞いていた話と違う、と言う留学生もいる。入学前、入試前から、大学生活に関する正確かつ詳細な情報提供をすることや、イベントのようなものではなく、リアルな体験入学などの機会を設け、ある程度覚悟を持って大学に入学できるようにするべきではないだろうか。

## 3) 学業不振に陥らせないための支援

大学修学意欲の減退において語られていたように、日本語学校ではある程度日本語ができと思っていた留学生でも、大学に入学すると自分の日本語が通じないことや、授業の日本語が理解できないことで挫折を経験することがある。日本語学校での日本語と大学の専門科目で使用される日本語には、内容的にも教員の話し方などにも大きなギャップがある場合がある。大学においても留学生の日本語教育を強化するとともに、専門科目に必要な背景知識を得るための授業を設置するなど、専門科目と日本語の担当教員が連携し、少しでもそのギャップを埋めるための工夫をしていく必要があるだろう。

## 4) 学業不振に備える支援

今回インタビューした学生に限らず、学業不振に陥ったり、中退したりする留学生の多くが、問題が生じた際に自己完結、または留学生仲間からの情報のみで判断、対処しようとする傾向があると感じる。大学の教職員には相談せず、大学の支援機関があったとしてもそれを利用しない。大学修学継続への支持要因として「周囲からの大学修学のための支援」があったように、支援をうまく活用できるような体制を整えておくことが必要であろう。学業不振などの問題が起きる前から、大学の教職員との関係を強化しておくこと、つまり、大学の留学生センターや相談機関の存在を周知することや、それらの機関を活用することへの敷居を低くする工夫が必要であろう。日頃から留学生との信頼関係を築く努力が大学側にも必要であろう。

以上、本研究では、私立大学に在学する東南アジア、南アジア出身の留学生を対象としたインタビューから大学入学後の修学意識の変化を示した。問題の背景でも取り上げたように、アルバイトとの両立が難しく、学業不振に陥ることから中途退学を考えるようになる状況も見られた。しかし、それは安易に選択されたものではなく、様々な困難や不安、迷いがあり、それにより修学への意識が揺れ動いた結果であった。そのような心理状態の中でも、周囲の支援によって、大学修学継続への意欲を回復している事例も示された。本研究の結果は、少数の対象者から得られたものではあるが、多様化

する留学生に対する支援について改めて考え、留学生自身が納得のいく留学生活を送るための一助となれば幸いである。

#### 主な参考文献

伊藤武彦・井上孝代(1999)「留学生の中途退学者の全国調査」『学生相談研究』Vol. 20 No. 1, pp. 38-48.

日本学生支援機構(2008)「平成20年度外国人留学生在籍状況調査結果」

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2008/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/06/data08.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2008/__icsFiles/afieldfile/2015/12/06/data08.pdf) (2019年5月20日閲覧)

日本学生支援機構(2019)「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/__icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf) (2019年5月20日閲覧)

中央教育審議会(2018)「ポスト留学生30万人計画を見据えた留学生政策」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryu/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/05/28/1405510\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryu/__icsFiles/afieldfile/2018/05/28/1405510_4.pdf) (2019年5月20日閲覧)